

## 近代ナショナリズムをめぐる理論的思索と実証的研究

—日本の植民地統治を中心に—

Theoretical Contemplation and Practical Study on Modern Nationalism:  
Japanese Colonial Rule

研究代表者 樋浦 郷子 (D3)

教員 駒込 武

研究分担者 山本 和行 (D3)

### 〔研究目的〕

本研究は、平成 18 年度研究開発コロキウム「近代ナショナリズムと帝国主義の展開と相克をめぐる基礎的研究—台湾・韓国・沖縄を中心に—」（研究代表者：山本和行）の継続研究として、近代ナショナリズムの歴史的展開に対する多種多様な理論的／実証的アプローチについて、教育の問題に即して整理し、理解・発展させることを主たる目的としたものである。ナショナリズムは近代人の心性を規定する強力なアイデンティティとしての力を発揮しつつあり、近代教育において「心をどう活かすか」を考えるために、ナショナリズム研究の理解・発展は不可欠である。この目的を達するため、ナショナリズム研究に関する理論的／実証的研究視角を融合し、新たな研究方法の確立を意図した。

### 〔研究経過〕

平成 18 年度の研究成果を引き継ぎ、Rwei-Ren Wu (呉叡人), *The Formosan Ideology: Oriental colonialism and the rise of Taiwanese nationalism, 1895-1945*, Ph.D. diss., Chicago University, 2003 (以下、呉論文と略記) の日本語訳完成を目指した。特に、平成 18 年度には未完のままとなっている呉論文 Chapter1&2 の完訳を目標とした。

該当箇所の内容は、ナショナリズム研究の理論的枠組みの提示と植民地主義の類型化から構成され、翻訳完成には理論的／実証的アプローチに関する理解と応用が求められる。また、日本の植民地統治を類型化するなかで、日本における近代国民国家形成に対する洞察が行われており、東北地方、北海道、沖縄といった地域への歴史的理解が要求

される。したがって本研究では、①授業機会を利用したナショナリズム研究の理論的理解、②フィールドワークに立脚した植民地主義・国民国家形成の実証的理解の2点に基づき、理論的／実証的アプローチを駆使した翻訳の完成を目指した。

①については、呉論文が中心的な先行研究として依拠している Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso. (ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』) と、Chatterjee, Partha. 1986. *Nationalist Thought and the Colonial World: A Derivative Discourse*. Minneapolis: University of Minnesota Press. の内容を理解し、翻訳に活かした。

②については、主に東北地方の歴史的理解および資料収集のため、戊辰戦争に関するフィールド調査を実施した。対象地域は会津若松、白石、水沢の各地に及んだ。日本における近代国民国家形成の草創期にあたる戊辰戦争に対する歴史的理解を、呉論文の読解に活かした。同時に、当該地方のみに保存されている近代史資料・植民地関係資料を駆使し、翻訳の完成を期した。なお、以上の研究活動について、研究代表者・研究分担者に加え、授業参加者3名が積極的に参加し、翻訳の完成に寄与した。

翻訳については、研究メンバーがそれぞれの研究課題や使用可能言語に基づいて分担した。また、お互いの翻訳箇所を相互にチェックすることで、誤訳を排除し、文体を統一する事に努め、日本語訳の完成に尽力した。

### 【研究成果】

本研究により、欧米の研究成果に基づいて構成された呉論文の Chapter1 の日本語訳を完成することができた。また、Chapter2 については、上記のフィールド調査により基礎資料の収集を実現することができた。草案作成に向けて準備を進めているところであり、近い時期に日本語訳の完成を期している。平成18年度の研究と合わせて、次年度にはすべての日本語訳が完成する見込みである。その研究成果の公表は、訳書の刊行という形での実現を目指している。

呉論文は欧米、台湾、日本の膨大な研究成果に基づく研究であり、ナショナリズム研究・植民地研究にあって非常に貴重な論文である。本研究はその日本語訳を期するものであり、呉論文の貴重な研究成果を日本のナショナリズム研究、および植民地研究に提示するものである。今年度の研究成果はその一部を形成するものであり、次年度以降の研究活動への展開が期待される。